

Un fauteuil pour l' orchestre (アン・フォトウイユ・プール・ロルケストル) 掲載

2012年12月17日 *fff* 見逃せない

「サミュエル・ベケットへの感動的なオマージュ」

ダシエル・ドネロ (演劇評論家)

ゴドーがとうとうやってきた。「私はゴドーです」と、彼は、『ゴドーを待ちながら』の有名な台詞「じゃあ、行こうか。行こう。」以来、その場から動くことの無かったウラジミールとエストラゴンに言う。ゴドーは彼らの前にいるが、彼らはそれに驚くことがない。事態はもっとひどい！彼らは、この迷惑な客と話すことよりも、ニンジン釣ることに没頭しているのだ。待つことは長過ぎはしなかったか。なぜなら、みな彼が来たことに無関心で、そして何も変わりはないからだ・・・。

戦闘準備だ！ベケットに衝撃を与える、なんと大胆不敵なことだろう！何？これは[『ゴドーを待ちながら』の] 続きなのか？急いでこの上演を止めねば！ああ！大逆罪を犯したのはフランス人でもアイルランド人でもない、日本人の不条理劇の巨匠なのだ。できる限りの訴訟を！文学権威主義は、とうとう語りかけるべき相手を見つける。それは彼と同じ時代を生きた作家、別役実である。いや、検閲官たちよ！ここにはどんな冒瀆的な言葉もない。それどころか、ここにあるのはサミュエル・ベケットへの感動的なオマージュだ、気難しい不平家には悪いが。

もちろんベケットの戯曲の構造は登場人物たちと同様に再び用いられているが、別役実の想像力が別の時代に別の作品を創り出している。研ぎすまされた彼の視点は、現代社会のなにものをも見逃すことがないという点で、これは陽気な続編だ。

『やってきたゴドー』は2007年に、優れた作家に与えられる名高い賞である紀伊国屋演劇賞を受賞した。1962年に、広島原爆の犠牲者に関する作品『象』で世に出た別役は、2009年には朝日賞も受賞している。

ベケットが1952年1月にミッシェル・ポラックに宛てた手紙の中で書いたことを思い出してみよう。「あなたは私に『ゴドーを待ちながら』についての私の考えをたずねました。(…) 私は、この作品を注意深く読む時に訪れるものと同様にこの作品に関してもよく分かりません。(…) 私はもはやそこにはおらず、私は決してそこには戻らないでしょう。エストラゴン、ウラジミール、ポゾー、ラッキー、彼らの時間と彼らの空間、私はそれらのほんの少しを、理解しようとする欲求と距離を置いてしか知ることができなかったのです。彼らは、あなたにそれを説明する義務があるでしょう。彼らは彼ら自身でそれをしなければならぬのです。私無しで。彼らと私、私たちは解き放たれているのです。」

そうなのである。登場人物たちは作家よりも長生きをし、彼らは 演劇的な別の場所を渴望する自由を持っている。彼らは解放されている。彼らは世界中の文学に属しているのである。ベケットの、そして別役の演劇においても、世界に存在することが同じように疑われる。見られるという確実性が疑われるのだ。一方はナチスの大虐殺の残虐さを、もう一方は原爆の残虐さを知っている。西洋と東洋がこのドラマの中で混じり合うのはそこである。二つの視点は同じ問いを投げかけている。人間は最も絶望的な状況の中でも生き延びることができるのか。歴史はこの問いに悲劇的に答える。

リアリズムに捕われぬ『やってきたゴドー』は、個人のドラマを描く。もしもゴドーが今日やってきたら、という、その出会いの不可能性あるいはその出会いの物語を生きることの不可能性を語る。そのようなわけで、木山氏の演出において、穏やかな禅風の庭のように置かれた舞台装置の中で状況が喜劇的に扱われたとしても矛盾してはいないのだ。俳優たちは、狂言（それは能の幕間に行われる喜劇であるが）を思わせる三谷昇氏の特に素晴らしい演技とともに、すばらしいものであった。

「この作品は様々な方法で解釈される。この作品には畏が散在しているために、演出家として私は慎重に行動しなくてはならないという気持ちです。私はしばしば、別役実はこの障害を巧みにかわすことを望んでいるのだろうかかと自問しています。私は、この作品に真面目で理性的な側面を与えることは避けるべきであり、リズムを与え、そこから魅力を生じさせるべきだと考えています。」と木山氏は言う。なんとも、『やってきたゴドー』は、期待以上に魅力とユーモアで我々を満たし、大成功をおさめた。ありがとうございます！

劇評のサイト Un fauteuil pour l' orchestre <http://unfauteuilpourlorchestre.com/>

掲載ページ

<http://unfauteuilpourlorchestre.com/critique-voila-godot-de-minoru-betsuyaku-a-la-maison-de-la-culture-du-japon/>

f = Bien (良い)

ff = Très bien (非常に良い)

fff = À ne manquer sous aucun prétexte (見逃せない)